

第7回講義 ウェスレーの宣教的聖餐論

1. テキスト 藤本満『ウェスレー』 359頁から375頁

聖礼典としての聖餐においては、神が与える側に立ち、犠牲としての聖餐においては、我々が自分自身を供える（献身する）側に立っている。主の聖餐は、聖礼典として定められている。（359頁）

ウェスレーはカトリックの化体説、ルターの共在説とその背景にあるキリストの身体の偏在の教理を否定した。ウェスレーの立場はカルヴァンのそれに近い。（361頁）

ウェスレーは事実臨在(real presence)の教理をとっていたが、キリストの出来事が臨在する〈神秘性〉なるものがある-ただ、ウェスレーの場合、臨在がパンとぶどう酒という物質性に閉じ込められてはいない。それは客体の個体的臨在を意味するのではなく、生ける・同的な人格が手段として動いていることを意味する。（362-363頁）

聖餐を通して伝えられるものは、第一に罪の赦しと義認。聖餐の聖礼典も、すでに与えられている信仰を〈確認する〉だけでの手段です、信仰を実際に〈与える〉手段だから。

聖餐が与える次なる恵みは聖化。聖餐はクリスチャンが神の力を受け、信仰と聖潔に成長していくための不可欠な礼典。（364頁）

また最後の恵みは栄光の約束でもある。聖餐は天から与えられる保証である。

この学課で学ぶこと

- (1) 聖餐式の意義を理解する。
- (2) 聖餐を通して具体的にどのような恵みが与えられるかを理解する。

不信仰に陥った者たちへの励ましとしての聖餐

ウェスレーの宣教のわざとしての聖餐を基盤にして

ウェスレーはその生涯にかけて聖餐を大切にしてきました。16歳になる以前には聖餐に与っていませんでした。日記、日誌を読むと、当時の英国教会が年に4回から6回しか聖餐をしていなかったのに対して、後期になると3, 4日に1度の割合で聖餐に与ったことがわかります。ウェスレーの聖餐は、最初は小規模の聖餐でしたが、1765年以降、メソジスト運動が広がるにつれて、聖餐受領者の数は増大していきました。「誰も空虚な心でその場を立ち去らなかつたと信じる」と日誌にはあります。聖餐式に6時間かかる記述も存在します。聖餐はメソジスト運動の内的な力となっていたのではないかと考えます。

1791年にロンドンのシティーロードチャペルで亡くなるまで、彼は馬に乗り、多くの地域を歩き、その距離三十万キロ、説教回数は四万回という精力的な生涯を送ります。身長は158センチだったと言われている彼が、これ程精力的に旅行をできたというのも、彼の福音宣教の情熱によるところが多いが、それだけでなく聖餐という場で信仰を確認していたからではないでしょうか。

聖餐の2つの機能

(1) 回心の恵みの手段

ウェスレーは聖餐を名ばかりのキリスト者が真実のキリスト者になる為の回心を与える儀式としてみていました。この意味において聖餐に宣教的な性質を持たせていたのです。ウェスレーにとって聖餐は先行する恵みを見出せなくなった者や罪が赦されたという確信を失った者が、聖餐を受けることにより回心を与えられ、信仰復活の手がかりを掴める場でありまし。これはウェスレーがソサエティにおいて、様々な教派の人々に聖餐の場を開放したこととも関連します。

(2) 確信を与える恵みの手段

ウェスレーは聖餐を信仰の位置(義認)を永続的に確認する場として考えていました。キリスト者は、自分の出発点を確認することにより、自己の信仰の原点である信仰義認に立ち返り、行為義認に陥るのを妨げることができるのです。信仰生活において、聖化のみに強調点があると、どうしても信仰が自己の状態や行為を頼り、恵みを受領するという視点がおろそかにされるのではないのでしょうか。それ故、生涯かけて神の救いと愛を確認する場が必要なのです。

この両者は、ウェスレーにおいては切り離し難いものです。ウェスレーは聖餐を永続的義認の場として捉え、絶えず聖餐式において自分の信仰の位置を確認すると同時に、聖餐に与る者に回心を与える機能を持たせ、宣教的要素を含んでいたのではないかと考えます。ウェスレーの聖餐は、名ばかりのキリスト者(Nominal Christian)が聖餐を受けることにより、もう一度信仰の道に戻り、救いの確信を持ち、真実のキリスト者(Real Christian)となって歩んでいくという側面があったのではないのでしょうか。

どうして回心の恵みとしての聖餐なのか？

この点に関してはモラヴィア派との出会いが大きいと考えます。モラヴィア派との出会いはアメリカに行く船上で起こりました。嵐が怖く、船底にしてみるとモラヴィア派の人々が祈り、賛美していたのです。彼らは死ぬのは怖くないと語りました。その姿に感銘を受け、接触をはかります。また、ペーター・ベラーとの信仰問答も忘れてはなりません。ベラーは「もう説教することもあきらめよう」するウェスレーに対して、救いがわかるまで説教しなさいと励まします。それがアルダスゲートでの回心につながります。(1938.5.24)

しかし、それですべてが解決したわけではありません。回心後もウェスレーの心の中では信仰の揺れを感じていました。揺れながらも聖餐に与るウェスレーの姿がそこにあったのです。

モラヴィア派との相違 モラヴィア派は恵みの手段はキリストのみであり、他の恵みの手段は必要ないとしました。ウェスレーは、そのような静寂主義に反対したのです。ウェスレーは以下のように考えました。恵みの手段を使用することがない人は、赦しの確信を失い、赦しを一度も得たことがないように感じてしまうのではないか。信仰に生きることなく、生涯罪人であり続けるのではないか。

ある事件: 回心後、ドイツの兄弟団を訪問 親交を深める(1938.6-9月) その後、1938.7.4 マイエボルンでモラヴィア派より聖餐に与ることを拒否されたのです。ウェスレーは、モラヴィア派から疑いを抱いているため平安がなく、休みなく揺れ動いている信仰者であって聖餐を受ける資格がないもの)として聖餐を拒否されました。それは、ウェスレーにとっては一大事でした。聖卓に進み出る相手を「疑いによって揺れ動く信仰者」と断じて、主の晩餐への出席を拒否するキリスト教とは一対何なのか? 恵みの手段は、このような状況の者に尊ばれるべきではないのか。ここで一切の基準とされた「信仰の確信の有無とは何か」ということでした。(ウェスレーメソジスト研究5 岩本論文 22頁)

フェッターレインソサエティ（ロンドンのモラヴィア派の集会）での騒動

1738年9月ドイツから帰国して、わたしはキリスト血潮を信じることによる偉大な救いを宣べ伝えました。同時にそれは、神のすべての戒めを守り、機会あるごとに、すべての人々に善を施しながら待ち望むべき救いでもあります。ところが翌39年9月ごろ、わたしたち兄弟の不在中に、第一点、「疑いや恐れを少しでも持つ者、清い心を持たない者は、義とされる信仰を持ってない者たち」と断じる者、第二点、「恵みの手段を否定しないと真の信仰を持つものではない」と、信仰の静止主義に陥る教えを主張する人々が私たちの群（フェッターレインソサエティ）の中に大きな混乱を呼び込んだ。モラヴィア派の人々は、人は疑いや恐れからまったく解放されなければ、また厳密な意味で新しい清い心を持たなければ、義とされる信仰に達することは出来ないと主張した。疑いや恐れを排除する前には、恵みの手段を守らなくてもよいと主張したのである。

しかし、わたしは彼らに答えたい。あらゆる恐れ、疑いの解決の前にも「ある程度の信仰」を得ることが出来る。新しい清い心を得る前にも、神の戒め、特に聖餐を守るべきである、と。実は、この真理を、わたしは、イングランド教会からだけでなく、モラヴィア派からも学んだのである。（岩本論文）

ここから生まれたウェスレーの結論：（1）聖書からみても、教会の伝統から見ても、群の人々の経験から見ても、信仰の度合いは存在する。（2）また確証（確信）の度合いも存在する。（3）「恵みの手段」は、確信に先立って奨励されるべきもの。（4）義認は必然的に確信を生むものとは言えない。（岩本論文）

信仰を失った人は誰でも、聖餐を受けることによって救いの信仰に戻ることができるという事実を発見しました。

真実のキリスト者(Real Christian) になることが目標 不信仰の者は聖餐に与るべし

ウェスレーは「不信仰の者は祈り、聖餐を受けるべきでしょうか。その通りである。求めよ。そうすれば与えられる。もしあなたがキリストが罪深い、助けようのない信仰者の為に亡くなられたことを知っているならば、パンを食し、杯から飲みなさい」と語る。

問題は不信仰の者(Unbelief)の内容。これは未信者(Non-belief)ではない。不信仰とは信仰者でありながらも、克服する信仰(Conquering Faith)を持っていない人、未だ、真実のキリスト者でない人々、神の恵みが未だに必要であることを知っており、キリストが罪深い、助けようのない人のために死んでくださったということを知っている人のことを意味しました。一般的な従順、神の戒めを守ることに於いて救われていると思っているが、内的な従順、聖性を獲得しているかという意味では確証がない者。ウェスレー自身の言葉で言えば、「僕の信仰」は持っているが「神の子の信仰」を持っていない者。

先行する恵み

ステーブルスの疑問：ウェスレーは「主の晩餐は先行する恵みを伝える」と語ります。この意味は何なのでしょう？ 全ての人を招くことにつながるか？ 2つの疑問 ① 先行する恵みは義認の前にも存在しているので、未信者もそれを受け取ることを意味しているのでは？ ② もし先行する恵みが与えられるならば、その人が受けた時点では先行する恵みを受け取っていないのか？

ステーブルスの結論：信仰者は、聖霊の火を消して、霊的な事柄が理解できなくなることが起こりうる。重要なのは信仰の度合い(Degrees of faith)の存在 ウェスレーは信仰を回復し

たいと願う全ての信仰者を聖餐に招いた。たとえ、その人が先行する恵みを失っていたとしても、からし種の信仰は取り去られておらず、たとえ、信仰が弱められていたとしても、主の晩餐のテーブルで、先行する恵みを再び受け取り直すことができる。

例、マルコ9章14-29節 父親の信仰「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」神の意志に従いたいという叫び 「信じます」と「信仰のない」という表現は矛盾しているが、からし種の信仰はまだ取り去られておらず残っているのでは？ 信仰者は霊的な事柄への飢え乾きがなくなることが事実上ある。しかし、聖餐を通してそのような人も、もう一度先行する恵みを受け取ることが出来る。人が救いの確信を失うことがあったとしても、人はある程度の信仰を保持しているため、「からし種の信仰」において人はテーブルにつくことが出来ます。

オレ・ボーゲンの疑問：ウェスレーは聖餐を回心の恵みをもたらすものととらえているが、どのような可能性があったか？ その対象者はいかなる人か？

①先行する恵みが消えて救いの信仰がある程度なくなってしまった人。

②ウェスレー自身の言葉によれば「霊的な感覚が覚まされておれず、霊的な善や悪が認められない人」

③主が与えるものは何でも受け取る用意があり、その人が罪深く、助けようのない状態であるという認識を持っている人

オレ・ボーゲン結論：

①神は自由にその恵みを様々な手段を用いて伝えられる。

②そもそも主の晩餐は罪に陥った人に罪の取り消しを与える。一度信仰を保持していた人に赦しととりなしが与えられるとしたら、より劣った度合いの信仰を持っている人にも同じことが起こり得る。

③ウェスレーは自分の経験を通して 主の晩餐のテーブルで義とされたことを知っていた。

信仰者は、義とし、聖化する恵みを先行する恵みを基礎に与えられている。ウェスレーは、先行する恵みが聖餐によって与えられるとし、聖餐を回心の恵みの手段として捉えた。このことによりウェスレーは新しい段階へと踏み出す。

初めの愛に戻り、そこから新たに開始される信仰者の歩みの強調。聖化の第一段階への招き

真実のキリスト者として生きる 名目的キリスト者から真実のキリスト者へ

ウェスレーは以下のように語っています。

私達は自分自身を特定のセクトや党の創設者、首謀者として、立てているのではない。それは我々の考えから全く離れているものである。しかし、名ばかりのクリスチャンであるが、心と生活においては異端である人々を、真のキリスト者純粋なキリスト教に呼び戻す為の使者であると信じている。¹

ウェスレーの表現には「9分9厘のキリスト者」と「全きキリスト者」の区別も存在するが、ウェスレーの願いは天国への王路(Highway to Heaven)を歩む上で真実のキリスト者として生きることになりました。

当時、ウェスレーのまわりには名目的クリスチャンが多くいました。さらにクリスチャンになりながらも、信仰が長続きせず教会から離れている人がいました。ウェス

1 Works III, 240-46, A Preservative against Unsettled Notions in Religion, (1758).
Albert Outler, *John Wesley*, Oxford University Press, 1964, p.20.

レーの聖餐にはこれらの人々が視野に含まれていたのです。それ故に聖餐を回心を与える儀式として定義することは必要でした。ウェスレーの手紙や著作集には、人々が聖餐を受けて、祝福された例が存在し、積極的な聖餐理解が見られます。

式文 ふさわしくないままの問題 日本基督教団ではふさわしくないままでという言葉の挿入が問題になっていると聞きます。

芳賀氏の答え：もともと聖書に書かれている言葉をおろそかにしてはならない。『洗礼から聖餐へ』、80頁。

ウェスレーの答え：しかし、からし種の信仰さえあれば、聖餐を受けられる。ふさわしくないから聖餐を受けることができない→ふさわしくないままでも、いやふさわしくないからこそ「からし種の信仰」は取り去られていないので、聖餐を受けて、回心し、確信をあたえられようではないか。

聖餐と資格 後の時代には多くの人が主の晩餐は回心を与える恵みではなく確信を与える恵みであるとした。そして私達の間でも回心し、聖霊を受け、完全な意味で信仰者のみが聖餐を受けるべきだとした。しかし、私たちの経験は、主の晩餐は回心の儀式ではないということが誤りであることを示している。（ウェスレー自身の言葉）

聖餐を、神の宣教のわざとして提示する場合、最も重要なのは、聖餐受領者の資質です。ウェスレーは聖餐受領者の資格には注意深かったのです。習慣的な罪に陥っている人に対しては、厳しく対処しました。そして真実に悔改めた人のみが恵みに導かれるべきであると考えました。（大胆に神に近づく）

*もし我々が、積極的に応答するならば、神はさらなる恵みを私達に与えられます。そして救いに至るまで進むことができます。聖餐は、まさにイエスを個人的な救い主として望んでいる者にとっては、素晴らしい恵みの手段です。聖餐を受け取るには信仰が必要です。この意味において、オープンコミュニオンを主張しているではありません。聖餐受領者の資質が重要なのです。ウェスレーの立場は、信受者主義（Receptionism）（信仰を持って受ける倍餐者はそのパンとぶどう酒と一緒にキリストの体と血を受け取る）に近い立場です。

信仰を持って受けるのですから、オープンコミュニオンではないのです。

福音としての聖餐理解

私たちはこの聖餐のテーブルに自分の義を信じて厚かましくも聖餐にあずかりに来ている者ではありません。ここに来ることができるのはただあなたの多くのそして偉大な恵みによるのです。

聖餐のテーブルとは、メソジストのテーブルのみではなく、主のテーブルを意味する。そこでは主に会うことが起こる。ウェスレーは礼典を福音そのものとして見ていたと言っても過言ではないと信じる。

マクグラスの講演：「キリスト者は、救いが実現するのは、われわれが神と和解するときだけでなく、またわれわれが「他者とともに生きることを学ぶ」ときだけでなく、われわれが他者に向かって開き、われわれが神に抱かれてきと同じ抱擁において他者を抱くという危険なそして高価な一歩を踏み出す時に実現する。9頁「キリスト者が若い愛を思い起こし宣べ伝える中心的方法への一つへとわれわれの目を向けさせるのが聖餐式 ここに神の歓待(hospitality)を見出す。(13頁)

こんな罪深い私が聖餐に与れるのか。パンはぶどう酒は罪人のためにこそ有効であ

る。これがウェスレーのメッセージ。

小岩教会の状況 増え続ける外国人居住者 外国人登録者数..... 24,079人(2009年)

図1 江戸川区の現在の人口外国人人口の推移

国籍	1997	1998	1999	2000	2001	2004
合計	12,623	13,203	14,397	15,952	17,544	19,443

現在皆様の教会においても教会を訪ねる外国の人クリスチャンの方々は年々多くなっているのではないかと思います。江戸川区も例外ではなく、年々増加をたどっています。外国人居住者は2万5千人。小岩教会にも現在5カ国の方々が礼拝に出席しています。彼らは日本に来て、居場所がなく、教会に参加していない場合もあります。そういう人々に聖餐を開放していくことにより、宣教のわざとしての聖餐は可能ではないでしょうか。また罪深く、聖餐に与れないという人にもそれはよい福音となって、からし種の信仰さえあれば聖餐を受領可能ということになるのでは。

宣教のわざとしての聖餐の適用

①多民族から構成される会衆を創出し、小岩教会の会員が聖餐を中心とした礼拝を守りながら、多民族の牧会をいかに、そして、どの範囲まで理解し実現することが出来るかを明確化する。

②小岩教会を囲む多民族共同体に対して、キリスト教の礼拝に参加する機会を与え、会衆が効果的に宣教を行っていける方法を発見する。

式文の作成 以上のことを実現していく為に、筆者は式文を新たに作成することの必要性を痛感しました。

日本人が聖餐を受ける上で最も問われるのは、罪を悔い改め、神によって遣わされたキリストを信じ、救われた自分を追体験すると同時に、そのことに感謝して自己奉獻にまで至る道筋である。アナムネーシス(想起)、エピクレーシス(聖霊降臨の祈り)が重要。

エピクレーシスの祈り(聖霊降臨の祈り)を重要視するウェスレー ウェスレーは聖霊の美德によりキリストが神秘的な仕方で臨在すると考えた。その意味ではカルヴァンの聖餐論に近いと言われる。

小岩教会の場合には、英語圏の方には毎週牧師が自分の説教を翻訳して配布している。しかし、もう一つ一体感がない。聞くだけの恵みの分かち合いには限界があると痛感する。やはり可視的な恵みの分かち合いが必要

小岩教会は家庭的な教会から礼拝を大切にしつつも宣教的である教会として変身中

聖餐は自己の本当の姿に気づかせ、悔い改めの恵み(Convincing grace)へもたらす。悔い改めの恵みにより、人は神からいかに離れているかに気づく。人は、真実に悔い改めて、愛において生かされる時にキリスト者は恵みにおいて成長することができる。 共同体的恵み 敬虔の業と慈愛の業の媒介としての聖餐を強調した

資料 11 説教 「絶えず聖餐に与かる義務」を読みましょう。